

山頂の椅子

彼女は山に立った。岩の山である。息をするためだった。

王は云った。眉間にしわを寄せている間は王にはなれない。目にはいたずらな10歳の好奇心と、人間の内を見透かす賢さを。

ばれなければよいのだ。ばれなければそこにないものだって我々は堅持することができ。しわが深くなった。

人生は簡単だと、ここでは言い切れるかもしれない。王は笑う。こちらを見ない。

眼のふちに刻まれたしわの深い谷を風が通った。

なぜひげを伸ばさないのでですか。

嫌いだからだよはっは。

威厳が出るのでは？

要らないのだよはっは。

この人という時間は好きだ。彼はこちらを見ない。

また風が通った。

この人にひげがあったなら、ひげもまたこの人の精神と同じように風にたなびくのだろう。

ゆらりゆらりと体をくねらせ、自らのその様子にまた笑い、そうしてこの美しいしわが増えていくのか。

彼はすべてを受け止める。

矢を素肌で受け止めることの強さを、

それによって流れる血の鮮やかさは放った者の目にも届く。

彼はまだ笑っている。そのものは駆け寄って言う。

王だとは思わなかったんだ。ひげがないから。